



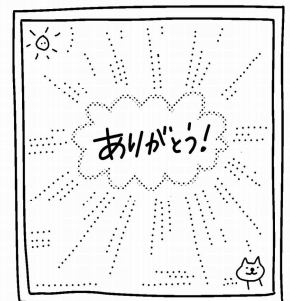
☆オリンピックで勇気づけられ、導かれた選手たち☆

20数年前の同じ時期、日本の長野で冬季オリンピックが開催された。スピードスケートでは、清水宏保選手が金メダルを獲得し日本中が熱狂した。当時11歳だった彼女はその姿を観て「私も清水選手のように感動を与えられる選手になる！」と心に誓った。少女の名は、小平奈緒といった。時を同じくして、当時3歳だった男の子は小児喘息に悩まされていた。そんな時、男の子のご両親が観て、共感したのも、清水選手の姿だった。実は清水さんも幼少期にぜんそくで苦しんだ。スケートを始めた理由も、父親が「体を強くするにはスポーツをした方がいい」と勧めたからだ。清水選手が運動をしながら少しずつ克服していった経験はやがて、彼をアスリートとして大きな成長へと導いた。長野オリンピックでの活躍もあり、大会後、様々なイベントに参加した清水さん。その中の一つに、3歳の男の子と出会った仙台でのイベントがあった。おかつぱ頭をした男の子は清水さんの元に駆け寄ると、サインをせがんだ。差し出されたのは、色紙ではなくリュックだった。清水選手がサインした横には、フィギュアスケートの「皇帝」、ロシアのプルシェンコさんのサインがあった。その二人のサインを見つめながら男の子は無邪気に、「ヒーロー2人からサインもらっちゃった」と喜んだ。そのおかつぱ頭の男の子こそ、羽生結弦選手だった。清水さんは、「その時、お母様に言われた言葉を忘れない」と言った。「この子は喘息なんです。清水さんも喘息なんでしょう。それでも金メダルを取られた。この子はフィギュアスケートを続けても大丈夫でしょうか？」清水さんは答えた。「大丈夫です。肺が弱い分、ハードな練習を続けなければなりません。それを乗り越えれば、人より練習した分、世界を相手に戦えるようになるんです。」清水さんと羽生選手が再会を果たしたのは、羽生選手がソチ五輪で金メダルを獲得したあとだった。「すごいね。だから大丈夫だといったら。」清水さんがそう言うと、羽生君は驚いた顔を魅せながら言った。「えっ、僕のことを覚えていてくれたんですか！！」清水選手が金メダルを獲得した姿に感動し、勇気づけられた少女と男の子の二人は、20年後の2018年、平昌オリンピックで共に金メダルを獲得した。きっと、その二人の姿を観て感動し、憧れた数多くの子どもの中からきっと、数年後、数十年後に冬季オリンピックの舞台上で表彰台に立つ日本人がいるのだと思う。感動と憧れが人を勇気づけるスポーツの力は素晴らしい。



☆「ありがとう」の反対語は・・・？☆

質問です！『「暗い」の反対語は？』・・・「明るい！」
 『「速い」の反対語は？』・・・「遅い！」じゃあ、『「ありがとう」の反対語は？』・・・「馬鹿野郎！うざい！ごめんなさい！どういたしまして！」・・・など出た。「答えは・・・『あたりまえ（あたり前）』です。」



ありがとうの語源は『有り難し』。つまり、『ある』ことが『難しい』ということなんだ。だから、あるのが当然と思っていることは『有り難し』の正反対。『ありがとう』の反対は『あたり前』ということなんだ。親が食事を作ってくれるのはあたり前と思っている人は、ありがとうという気持ちがないし、自分が困っている時に誰かが助けてくれたのはあたり前と思っていたら、ありがとうは言えないよね。でも考えてみたら、そのどちらだってあたり前じゃない。そういう事は身のまわりにいっぱいあるはず。もう一度「有り難いことだ」という目で見よう。自然に感謝の念が湧いてくることが多いはずだ。